

疾風勁草

2020. 4. 8

令和2年度がスタートするにあたり、思い浮かんだ言葉が「疾風勁草（しっふうけいそう）」だった。「疾風に勁草を知る」の略である。「疾風に勁草を知る」とは、激しい風が吹いてはじめて丈夫な草が見分けられるという意味である。そこから、苦難や苦境、厳しい試練にあってはじめて、その人の節操の堅さや意志の強さがわかることのたとえとして使われている。疾風とは激しく速く吹く風、勁草は強い草である。出典は中国の歴史書の一つ「後漢書」である。

今、日本はまさに疾風の只中にある。いや世界中がそうである。福島県民にとっては、9年前の疾風がまだ収まらないうちに、台風、大雨、そして今回の疾風第二波である。

3月4日（水）からの臨時休業、3月30日（月）の登校日、4月1日（水）からの教育活動再開、そして本日からの学校再開、言葉だけを見ていけば状況は好転しているかのように思われる。しかし、現状は悪化の一途をたどっている。それでも、学校は再開された。でき得る限りの入念な感染症対策を施すという条件を付けてのことである。

学校は教育の場である。小学生には小学生の、中学生には中学生の、高校生には高校生の教育をするべきタイミングがある。これがずれると、挽回するのは難しい。そこで、命を守ることと教育の機会を保障することとの折り合いをつけなければならない。

何とか新学期をスタートさせることはできたが、今後の状況によっては、いつ再び臨時休業になるかわからない。そうなってもすぐに対応できるような準備をしておく必要がある。対策として、オンライン授業などが考えられるが、本校の施設設備で可能なことと、そうでないことがある。何ができて何ができないのか。何が足りないのか。今後も検討が必要である。

学校が果たすべきこととして、生徒の命を守ることがある。これは最優先事項である。他には、学校の通常のリズムを守ることが挙げられる。このことを何とか死守したい。4月中の行事等の在り方を検討したが、現在のところ、生徒の活動で中止としたものはない。やり方を工夫してすべて実施することになっている。中止としたのは、PTA総会だけである。

本校の生徒たちも、世の中がただ事ではないことは十分に理解していることだろう。毎朝の検温、マスク着用、消毒液の使用、換気、距離を十分にとった座席配置など、通常とは違った対応がこれから続くことになる。ひとえにご家庭の理解と協力、そして生徒の意識の高さと実践力がないとこの対応を続けることはできないし、効果も表れない。

3月30日（月）の登校日には、離任式を行った。感染症対策をとった上で、本校の屋内施設で一番広い体育館を会場として実施した。梁川高校を去る先生方の最後のお話には耳を傾ける生徒たちの表情が印象的だった。神妙な面持ちという言葉が合うかどうかはわからないが、先生方のお話を心で聴いていたことは間違いない。

私は、あの生徒たちの眼差しを信じたい。この状況のもと、毎日毎日感染症対策を続けていくにはかなりのエネルギーを要する。それでも、本校の生徒たちはやってくれると思う。本校の生徒も先生方も“勁草”であることをこれから証明していくことになる。そして、福島県民も日本国民も世界中の人たちも、どんな疾風にも負けない勁草であることをお互いに認め合いたい。